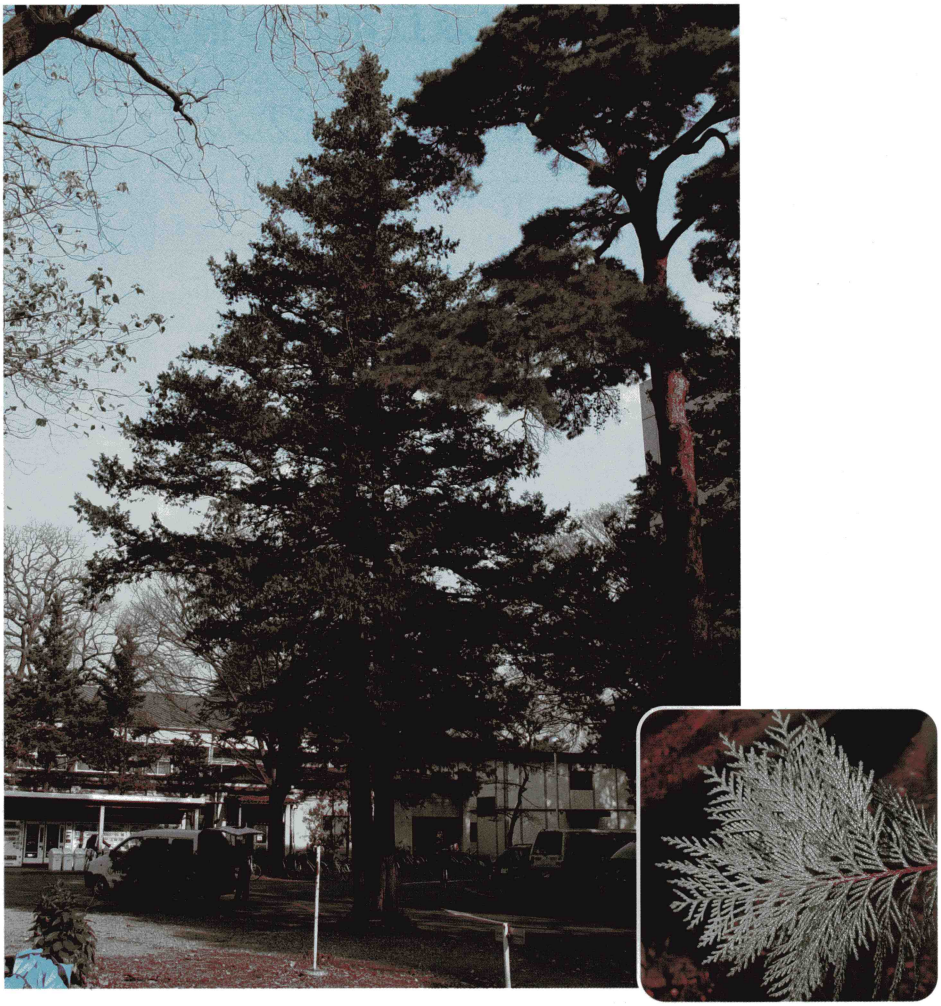
農工大の樹　その46



〈解　説〉

サワラ

（ヒノキ科ヒノキ属の種、学名：Chamaecyparis pisifera Sieb. et Zucc.）

この種は日本特産の常緑針葉樹で、樹高40m、胸高直径100cmにも達します。自然分布は、岩手県早池峰山から長崎県島原半島までですが、日本海側地域には分布しません。本学構内にもヒノキと共に多く植えられています。サワラの和名は材がヒノキに比べて「さわらか（軽軟）」であることにちなんでいると言われます。材はヒノキよりも軽く、軟らかいため加工が容易で、建築材、器具材として多用途に使われてきました。また、水湿によく耐えるので水桶、たらいにも利用されました。この種は園芸種が多く、庭園に植えられるヒヨクヒバ、ヒムロなどはこの変種です。ヒノキによく似ていますが、ヒノキは枝が多く、樹形が円錐形になるのに対して、サワラは隙間が多く、梢が尖ることですぐに区別できます。また、葉をみると、ヒノキは先が丸いのに、この種は鋭く尖ること、ヒノキは葉の裏の白色の気孔腺がY字に見えるのに、これはX字に見えることなどで簡単に区別できます。ぜひ、チェックしてみてください。

（農学部教授　福　嶋　　司）